カリオカの風

リオデジャネイロ日本人学校通信

９月号

令和５年９月　１日

校長　小堺 広司

学校教育目標

「自他の生命と人権を尊重し、ねばり強くたくましい心豊かな児童生徒を育成する」

～世界の架け橋となる子どもたちの育成を願って～

主体的に 対話して 学びを深め、大きく成長する

２学期は大きな行事が２つあります。

９月１１日（月）連邦大交流

１０月２８日（土）文化祭　です。

どちらも、ブラジル人の学生さんをお招きして、一緒に日本の文化を伝えたり遊んだり、ブラジルの文化を学んだりと、体験を通して交流が深まるだけでなく、知識として学ぶこともたくさんあります。

今回、特に大切にしたいことが、「与えられたことをするのではなく、自分たちで考えて学びを深める」ということです。

８月１８日(金)、体育館でこの趣旨を説明し、さっそく話し合い活動を始めました。

連邦大交流では、５つのグループに分かれて、上級生を中心に自己紹介の文章を練り、実際に話す練習をしました。次に、日本の遊びを紹介して一緒に楽しむために、どんな遊びがふさわしいか考えて、必要な道具を作ります。お互いの進捗を確認しながら、手探りではありますが、少しずつ前進しています。

文化祭は、実行委員を募り、ゼロから原案を作ります。イメージしたことを実現させるまでの準備や事の可否など、話し合う中から見えてくるものがあります。

どんな仕上がりになるか、まずはやってみることが大切です。主体的に行動する姿を見守りながら子どもたちの成長を支えてまいります。

＜９月１日全校朝会・校長講話より＞

１９２３年９月１日。何の日かわかりますか？今からちょうど１００年前の今日、関東大震災が昼の１１時５８分に発生します。この時、父は生後６か月で、浅草の蔵前という場所で地震に遭います。お昼時だったので、町は火の海となり、私の祖母は父をおんぶし、父の姉と兄の手を引いて東京の街を逃げます。さて、父の実家の目の前は隅田川。みんな水を求めて蔵前橋を渡っていきます。８㎞先には飛鳥山があり、みなさんならどちらに避難するか考えてみましょう。私の祖母の選択は飛鳥山でした。もし隅田川を渡っていたら、本所被服廠という東京ドーム1個半くらいの敷地があるのですが、結果的に逃げ込んだ３万8千人の人は焼け死んでしまいます。関東大震災では１０万５千人の方が亡くなり、火災による焼死が９割だったと言われています。私の祖母が蔵前橋を渡って隅田川方面に逃げていたら皆さんと私が出会うこともなかったのです。リオ日学で皆さんと私が出会ったことは、ものすごい偶然であり、見えない力によって導かれているとも言えます。皆さんの背景にもきっと存在する運命を感じながら、毎日を大切に過ごしたいものです。

『最後だとわかっていたら(Tomorrow never comes)』という詩があります。２００１年９月１１日アメリカで起きた同時多発テロの後SNSを通じて広まり有名になりました。事件はニューヨークの世界貿易センタービルにハイジャックされた旅客機２機が衝突して倒壊し、３０００人の方が亡くなり、そのうち３４３人は救助中の消防士だったそうです。亡くなった２９歳の消防士が生前に書いたものとされていましたが、実はノーマ・コーネット・マレックさんという女性が不慮の事故で１０歳のお子さんを亡くした時の悲しみを描いたものでした。どちらが作者であったとしても共通する悲しみを感じます。

「私たちは忘れないようにしたい。明日はだれにも約束されていないのだ」

「もし明日が来ないとしたらあなたは今日を後悔するだろう」

「だから、いつでも、いつまでも、大切な存在だということを伝えよう」

「“ごめんね”,“許して”,“ありがとう”,“気にしないで”を伝える時を持とう」

「そうすれば、もし明日が来ないとしても、あなたは今日を後悔しないだろうから」

この詩は私たちへのメッセージです。当たり前すぎて見えなかった「日常」の素晴らしさ、「ありがとう・いってきます・ただいま・いただきます」など言葉の大切さ、リオ日学で出会った仲間を思いやり感謝の言葉を伝える優しさ。「大切な人と、今日、話そう」。これからの生活に意識してみてください。

○「聞くこと」から「伝え合う」喜びへ！

～　全校朝会・教員の話より　～

２カ月に一度、全校朝会で、リオ日学の教員が順番に自分の専門分野や興味のあることを題材に、子どもたちに話をします。

これからの時代はコミュニケーション力の育成が大切であり、『聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと』を計画的・意図的に学校生活に取入れ、そこから、他者の思いを受け止め、自分の考えを伝え合える子どもたちに育ってほしいと願います。

そのひとつの試みが全校朝会であり、「聞くこと」から話の内容を理解して、自分ならこう考える、自分の生活に取り入れてみようなど主体的に物事に向き合い、意見が言えるようになることをねらいとします。

「伝え合う」ことが生きる喜びとなるように、これからも教育活動を工夫してまいります。

以下、教員の話の抜粋です。

＜６/１　中田先生「当たり前を疑え」＞

大学の先生が「宇宙人は地球にいる」と話したことがあります。当たり前に聞き流すと真偽を疑うことなく信じてしまいます。地球規模で起きている一番の問題は何だと思いますか？

地球温暖化が話題になっていますが、最近考えていることに「温暖化は本当に起きている？二酸化炭素が増えて暑くなるというが、スマホのニュースが本当に正しいか、二酸化炭素が悪いなら、恐竜の時代には二酸化炭素がもっと多かった。」ということです。「本当にそうなのか」と「当たり前」とされていることを疑ってみるとよいと思います。そのためにも、「なぜだろう？」という視点を持って情報を集めてみることです。さらに集めた情報を分析してみるために本を読んだり普段の勉強を頑張ることが大切です。まずは、授業をしっかり受けましょう。

＜8/14　稲垣先生「おのれの光と影を知る」＞

『ゲド戦記』を読んだことがありますか？

私は１年前に読んだのですが、ジブリの映画にもなった名作です。内容は魔法使いのゲドが、いろいろできるようになり、禁止されている危険な魔法を使い、死者の霊とともに、自分の心の闇である「影」の部分を呼び出してしまい、苦しみます。

便利で役立つもの（ひかり）と影（うら）という考え方は世界に通じるものがあると思います。たとえば、エネルギーのガソリンには二酸化炭素・温暖化などの影があります。風力発電なら良いかと言えば環境破壊や鳥がぶつかる課題があります。原子力なら放射性物質です。携帯電話は便利ですが、SNSで人の悪口を書き込むなどの影があります。私はバレーボールをやっていましたが、少し上手になると、できない人やチームをバカにしたり、下に見てさげすむようになってしまうなど気を付けなければいけないことを実感しました。

ゲド戦記から学んだことは、おのれの光と影を知り、影に目を向け、光と融合させ、自分らしく生きるということです。今の皆さんならそれができます。この調子で頑張りましょう。

○ 海上自衛隊がやってきた！

８月１３日（日）、海上自衛隊の練習艦隊「はまかぜ」「かしま」が、太平洋・アラスカからアルゼンチン・マゼラン海峡を通って、リオデジャネイロ・グァナバラ湾に浮かぶモッカンゲ島（ブラジル海軍潜水艦基地）に寄港しました。

リオ日学の子どもたちは見学に招待され興味津々たくさん質問をします。中でもスマホ使用は他国に位置情報が特定されてしまうので禁止され、艦内は電気を使わない伝声管のような道具を使用しているという話や、カレーは洋上で曜日を忘れないために土曜日に食べていたのが、週休２日制により金曜日のお昼になった話など、とても気持ちよく答えてくださいました。

午後は、リオ日学の体育館で歓迎会を開き、まだ大学を出たばかりの若者と熱く語り、将来幹部となって働く自衛官のみなさんにエールを送りました。

○ NIE タイムが目指すもの

中学生は毎週金曜日にＮＩＥタイムを実施しています。新聞記事を読んで感想レポートを書き月曜日に提出します。この活動が目指すものについて、日浦先生が語ってくださいました。

「言葉を使った表現力を鍛える」
「文章が書けると、話せるようになる」
「記事から発想を飛ばし自分の考えが言える」
「文字を大切にする」・ひらがなを漢字に
・言葉の繰返しを避ける・読み手を意識する
・起承転結でまとめる
「日本の今を知る」

日々の積み重ねが必ず大きく実を結びます！

＜震災から下町風情に父を想う＞

父の実家はおかず横丁という商店街で八百屋を営み、震災や空襲から復興しいつも笑い声が響いていました。今は親せき付合いが遠のいたものの、父のルーツを辿って善提寺のある浅草や蔵前橋をフラフラとあてもなく歩くことが楽しみでした。

震災から１００年の節目は、当地から想いを馳せ、父が生きていれば１００歳！？など、小さな驚きを覚えます。父の好物だった江戸前の天ぷらと甘いお稲荷さんでも作ろうかな。